『歴代寶案』校訂本第十二冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会教育長　翁　長　良　盛

琉球と中国との進貢・冊封の関係は、沖縄の歴史と文化に大きな影響を与えてきました。洪武五年（一三七二）、中国の洪武帝は琉球へ使者を派遣して、明国の建国を告げ、入貢を促してきました。これに応えて琉球国中山王察度は、弟の泰期を派遣して進貢品を納めました。こうして中国との進貢貿易、正式の国家間交渉が開始されたのです。以来、明治初年にいたるまで、約五〇〇年間に及ぶ親密で長い交流の時代が続きました。琉球は、この中国との進貢貿易を軸にして、また日本、中国、韓国、東南アジア諸国とほぼ等距離にある地理的条件を生かし、十四世紀末からおよそ二〇〇年にわたり、朝鮮国やシャム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々と交易を行い、これらの国々の政治、経済、文化等の影響を受けながら、東アジアの一大貿易国家へと発展しました。

これらの国々と交わした外交文書は、原文書あるいは写しや控えのかたちで外交を専任する久米村の天妃宮に保管されてきました。しかし、長い年月の間に、これらの筆写文書や控文書も破損・散逸の恐れが生じたため、王府は久米村にその編集を命じました。こうして一六九七年に『歴代寶案』第一集四十九冊が二部作成され、首里王府と久米村にそれぞれ保管されることになりました。この第一集には、一四二四年から編集時点の一六九七年までの外交文書が収録されています。その後、一六九七年から一八六七年までの琉球・中国間の往復文書は、『歴代寶案』第二集二百冊、第三集十三冊として編集され、ほかに別巻八冊（うち、第二集目録四冊）が編集されています。しかしながら、『歴代寶案』の王府本は、廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたといわれますが、現在その所在は不明です。また久米村に保管されたものは、一九三三年（昭和八）に旧県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸しました。幸いなことに旧県立図書館に移管された久米村本から数種の影印本と写本が作成され残っていました。

沖縄県は、一九八九年度（平成元年度）から、これら現存する影印本や写本を元に『歴代寶案』の編集事業に着手し、一九九一年度（平成三年度）から刊行を開始しました。この編集事業は、現存する影印本、写本および関連史料を校合、校訂して、『歴代寶案』の原

本に近い校訂本を作成し、併せて一般に普及するための訳注本等も編集、刊行する計画です。これにより、今後の歴史研究に大きく寄与できるものと期待しています。

平成二年度の一九九一年三月の締結以来、沖縄県教育委員会と中国第一歴史檔案館との間で交わされている学術交流に関する協議書も、今年度は十年目を迎えます。この間、中国第一歴史檔案館で発掘、提供された琉球関係檔案史料は『歴代寶案』の編集事業および琉球・中国交渉史研究の発展に大きく寄与しており、その成果の一端は一九九二年（平成四）から沖縄と北京で交互に開催され、すでに五回を数える「琉球・中国交渉史に関するシンポジウム」に反映されています。

本年度は校訂本第十二冊（第二集巻一六一～一七三）を刊行することになりました。内容としては、一八三五年（道光十五）から一八四一年（道光二十一）の間の進貢、接貢、謝恩、中国船の漂流、琉球漂流民の送還等の貴重な中国との往復文書が収録されています。一八三八年（道光十八）、中国より、冊封正使林鴻年・副使高人鑑等が派遣され、尚育が琉球国王に冊封された時の関連文書も含まれております。県民をはじめ研究者の間で広く活用され、本冊の刊行が今後の沖縄の歴史研究の一助となることを願っております。

最後になりましたが、本年度の校訂本の刊行につきましては、校訂を小島晋治先生に担当していただきました。また、影印本、写本および関連史料を所蔵する国内外の各機関には多大のご協力をいただきました。深甚なる感謝を申し上げ、刊行のことばといたします。

二〇〇〇年（平成十二）七月